

フィールドワーク・インターンシップ実践報告

地域資源マネジメント学科文化資源マネジメントコースにおける
フィールドワーク「松山市中心部の文化資源を探る」の実践

寺谷亮司・村上恭通・楨林啓介・井口梓・大谷尚之・淡野寧彦
(地域資源マネジメント学科)

A Report of Fieldwork “Investigating Cultural Resources in Matsuyama City” on a Curriculum
of the Cultural Resource Management Course

Ryoji TERAYA, Yasuyuki MURAKAMI, Keisuke MAKIBAYASHI, Azusa IGUCHI,
Naoyuki OTANI, Yasuhiko TANNO (Regional Resource Management)

キーワード：文化資源、フィールドワーク、保全、活用、松山市

Keywords : Cultural Resource, Fieldwork, Conservation, Application, Matsuyama City

【原稿受付：2017年6月29日 受理・採録決定：2017年7月14日】

要旨

2017年4月に、「松山市中心部の文化資源を探る」と題したフィールドワークを、地域資源マネジメント学科文化資源マネジメントコース所属の教員6名と1・2年生31名が参加して実施した。この中では、道後温泉、道後公園、大街道・銀天街商店街の3ヵ所において、現地のステークホルダーによる案内や質疑応答などが行われ、当該地区における文化資源の保全や活用に関する情報共有や検討がなされた。また、2年生にはあらかじめ、フィールドワークで訪れる場所に関する事前学習と資料作成、およびこれらをもとにした現地での口頭説明を課した。フィールドワーク終了後には、とくに興味を持った場所や活動等についてのレポートの提出を全学生に求めた。本フィールドワークにおいて、実施上の大きなトラブル等は発生せず、学生らはステークホルダーの話を熱心にメモしたり、多くの質問を投げかけたりするなど、積極的な行動がみられた。提出されたレポートからも、身近な場所でありながらこれまで気付かなかった文化資源の存在や価値を意識する記述が多数みられ、コースにおける今後の学びに結びつく経験や学習機会となったことがうかがわれた。

1. はじめに

2017年度において、愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科文化資源マネジメントコース（以下、文化資源コース、と略記）は、教員6名と1・2年生の学生32名で構成される。文化資源コースが掲げる「地域文化の保存・継承・活用と連動した地域振興や観光振興の取り組み」（社会共創学部HP）を地域のステークホルダーらとともに展開していく上で、フィールドワークを通じた学びは欠かすことのできないものであり、この本格的な活動は、2年次の夏季休暇期間以降に実施される。この中では、当該地域における詳細な調査やプロジェクトの企画立案などに教員・学生が一体となって取り組むが、それに先立ち、地域を見る目の養成やステークホルダーとの関わりを構築する手法を身に付けることなどを目的に、文化資源コースでは日帰りの移動型フィールドワークを実施している。2016年度は、7月に愛媛県南予地方を対象として、松野町の河後森城（かごもりじょう）や宇和島市の遊子水荷浦の段畑（ゆすみずがうらのだんば

た）などを訪れ、各地での文化資源の保全・活用等について地域のステークホルダーより案内を受けた（淡野、2017）。2017年度は4月に、松山市内において「松山市中心部の文化資源を探る」と題したフィールドワーク（以下、本FW、と記す）を実施し、やむをえない事情による欠席者1名（学生）を除く、コースの全教員・学生が参加した。本稿は、この実践内容について報告するものである。

2. フィールドワークの実施内容

1) 実施概要

本FWは2017年4月23日（日）に、愛媛大学城北キャンパスを集合場所、松山市銀天街商店街L字地区を解散場所として実施した（図1）。「道後温泉における観光とまちづくり」、「道後公園における文化資源の活用と保全」、「大街道・銀天街商店街における活性化と地域資源」の3つを主要なテーマとし、各地において地域のステークホルダーよりそれぞれ1時間



図1 フィールドワークの行程 (2017年4月23日)

半程度の時間を設けて案内を受けた。また、移動手段は全て徒歩とし、主要な訪問場所へ移動する間に観察できる地域資源の所在についても注目した。

参加する学生に対してはあらかじめ、以下の3点にとくに留意するよう伝えた。すなわち、①屋外で長時間過ごすため、歩きやすい恰好や事前の体調管理を意識すること、②訪問先で説明を受ける際などのために、メモ用の筆記用具を必ず持参すること、③巡検に際しては、訪問場所において様々なステークホルダーに案内を依頼しているため、こうした方々に対する礼儀と感謝の念を持つとともに、訪問場所についての積極的な質疑応答ができるよう、可能な限りの事前学習をしておくことが望ましいこと、である。

また2年生に対しては、2名1組となって以下の8地点に関する資料作成とフィールドワーク当日の現地での口頭説明を求めた。8地点とそのテーマは、①愛媛大学およびその周辺部の歴史、②道後温泉の歴史と現在、③道後公園(湯築城跡)の歴史と変容、④廃線跡に見る明治期における松山の鉄道、⑤勝山通り付近の歴史ある建築物、⑥ロープウェー街のまちづくり、⑦大街道東部の盛り場の特徴、⑧大街道商店街の成立・発展・現在とし、図表の含め方や参考文献等の書き方などを指定する資料作成要領もあらかじめ提示した。この資料については、各地点担当の学生に文書ファイルを提出させた後に教員が編集し、計23ページの冊子として本FW参加者全員に配布した。

2) フィールドワークにおける実施状況と主な知見
主要テーマ3つのうち、「道後温泉における観光と



図2 「空の散歩道」より道後温泉地区を俯瞰
(淡野撮影：2017年4月23日)



図3 道後公園内の土塁展示室の見学
(淡野撮影：2017年4月23日)



図4 松山銀天街L字地区再開発連絡協議会事務所で
の質疑応答
(淡野撮影：2017年4月23日)

まちづくり」については、まず椿の湯2階において、松山市産業経済部道後温泉事務所の担当者より説明を受けた。この中では、道後温泉を訪れる観光客数の増加の一方で、同地の観光に大きな影響を及ぼすことなく道後温泉本館の修復を進める必要のあることや、「飛鳥乃湯泉(あすかのゆ)」を2017年秋に開業し、施設を通して道後の外湯文化や愛媛県内の様々な文化(地場産業)を紹介すること、また道後温泉地区全体を観光客らが回遊するためのソフト面での仕組みづくりも進められていることなどが述べられた。その後、

道後温泉本館南部の冠山駐車場そばに整備された「空の散歩道」へ移動し、道後温泉地区を俯瞰しながら主だったまちづくりの成果に関する説明を受けるとともに、隣接する分湯場において旅館等の内湯へ温泉を供給する仕組みについても説明を受けた(図2)。

「道後公園における文化資源の活用と保全」については、湯築城跡資料館と公園敷地内の2ヵ所を見学した。資料館では、館内展示物に関する説明のみならず、指定管理者制度を用いた公園の持続的な管理の方法や工夫などについても、管理者である愛媛コンソーシアムGENKIより詳細な説明を受けた。また公園敷地内では、コース教員の案内により、土塁などの発掘作業の様子や現在の展示状況などを見学した(図3)。

「大街道・銀天街商店街における活性化と地域資源」については、松山銀天街L字地区再開発連絡協議会事務所において、商店街の再生に関する取り組みや、都市内部の商業集積地としての商店街のあり方などに関する説明を受けた。その後、商店街の活性化などの方策について、学生からの提案や質疑応答などを実施した(図4)。

いずれのテーマにおいても、学生らはステークホルダーの話を熱心にメモしたり、多くの質問を投げかけたりするなど、積極的な行動がみられた。

フィールドワーク実施上の安全面での配慮として事故防止や体調管理などが挙げられるが、本FW中に体調不良を訴えた学生が2名いた。このうち1名は、本人より前日夜に体調不良を申し出る連絡があり、当日になって回復したために参加したものの再び体調が悪化したことから、午前中の行程終了後に帰宅した。当該学生の自宅が道後温泉近辺であったため、昼食休憩時間中に友人らが自宅まで徒歩で送った。もう1名は午後になって体調不良を訴えたが、自宅が遠方であったことから、コース教員1名が付き添って休息し、その後に本FWから離脱して帰宅した。行程全体として、移動中の大きなトラブルなどは発生しなかった。

3. フィールドワークに対する学生の意識

本FW終了時に、参加した全学生を対象に、本FWにおいてとくに興味を持ったことや新たに発見したことなどについて、A4用紙1枚程度のレポートを課した。レポートの形式はあえて指定せず、本FWで確認した文化資源の価値を参加しなかった人にも魅力的に伝えられるように意識しながら、各自の創意工夫をもって執筆するよう指示した。数日後に、参加した全学生よりレポートが提出された。レポート内の主要3テーマに関する言及をみると、特定のテーマにしぼっ

たものや3つ全てに触れたもののいずれもが存在していたが、各テーマに関する言及を単純換算すると、道後温泉が23名、道後公園が17名、大街道・銀天街商店街が10名であった。

道後温泉に関する言及では、飛鳥乃湯泉の開業や館内施設、装飾として用いる伝統工芸などの内容が目立った。伝統工芸の装飾が「『100年先まで輝き続ける松山の宝』というテーマのもと最先端のアートを取り入れ融合させる」ことを目的としている点に強く関心を示した学生や、和釘(わくぎ)の使用といった、特定の事物に深い関心を示した学生がいたことなどがレポートから読み取れた(図5)。また、道後温泉本館の修復工事中も営業が続けられる予定であるにも関わらず、旅行会社などからは営業期間の問い合わせが来るという担当者からの説明を受けて、情報発信の方法の重要性を指摘する記述もみられた。

次に、道後公園に関する言及をみると、公園南部の土塁展示室の存在自体を知らなかった学生が大多数であったことから、土塁の地層を直接目にしたことへの驚きを記した内容が複数みられた。また資料館の展示物について、「絵巻物は芸術的な遺産でしかないと思っていたので、遺跡の復元に使われていることに感心した」という意見もみられた。一方、公園の整備や管理についても、地域住民に愛される公園づくりを実現するために「観光、文化、歴史を1つのものとして考えることが大切であり、学芸員はそれを実現するための重要な役割を担っている」とのステークホルダーからの説明が強く印象に残ったという意見や、地域の企業や多くのボランティアの協力が重要であることを意識したコメントがみられた。

大街道・銀天街商店街に関する言及では、来訪手段となる交通機関の料金変更や駐車場の有無といった、各店舗の営業とは直接的には関わらない要素であっても、商店街の来客数に大きく影響することに関心を示した意見がみられた。またL字地区の再開発計画の内容と学生自身の利用状況やイメージを照合しながら、同地区における魅力と課題について詳細に検討したレポートもみられた(図6)。商店街のメインストリートではなく路地裏的な通りに注目し、長らく営業を続ける店舗の存在や静かで落ち着いた風景を評価すべきであることや、これらと近隣の新しい店舗などが共存できる仕組みづくりが必要とする考察がなされている点などが、このレポートの価値を高めていると考えられる。別のレポートでは、先述の道後公園と大街道・銀天街商店街での説明において、「子どもが来ることで大人もやって来る」という共通した考え方のあることに注目し、この考え方に一定の理解や支持を示しつつも、少子高齢化の傾向が続く現代社会のなかでは十

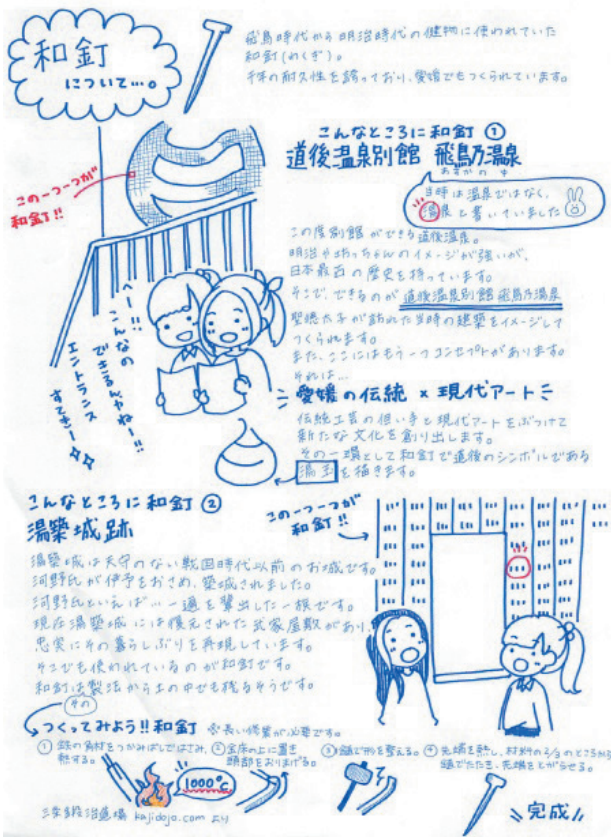


図5 道後温泉および道後公園に関するレポートの例 (文化資源マネジメントコース学生作成のものを、学生氏名等を伏せて引用)



図6 大街道・銀天街商店街に関するレポートの例 (文化資源マネジメントコース学生作成のものを、学生氏名等を伏せて引用)

分な成果につながらない可能性もあるのではないかと
の考察が示された。

最後に本FW全体についての意見や感想としては、
身近な場所でありながらこれまで気付かなかった文化
資源の存在や価値を意識する内容が多数存在し、
フィールドワークの重要性を多くの学生が意識してい
ることがうかがわれた。また、座学の講義で紹介され
た事物が実際に使用されていることを実感し、関心が
高まったとする意見も複数みられた。一方で、ステ
ークホルダーの活動状況を詳しく理解したことによ
って、地域の課題解決に向けて自分自身が具体的に課
題設定や行動を行うことの難しさを実感したという意
見も多くみられた。さらに、ステークホルダーとの間
でのコミュニケーションや信頼関係の構築をいかにス
ムーズに実行できるかという課題や、学生同士であ
っても参加した1・2年生の間で十分な交流を行えな
かったという反省を挙げる記述もみられた。

4. おわりに

本稿では、2017年4月に文化資源マネジメントコー

スにおいて実施した、松山市におけるフィールドワー
クについて記述した。

本FWでは、道後温泉、道後公園、大街道・銀天街
商店街の3カ所において、現地のステークホルダーに
よる案内や質疑応答などが行われ、当該地区におけ
る文化資源の保全や活用に関する情報共有や検討がな
された。また、2年生にはあらかじめ、フィールドワー
クで訪れる場所に関する事前学習と資料作成、およ
びこれらをもとにした現地での口頭説明を課した。
フィールドワーク終了後には、とくに関心を持った場
所や活動等についてのレポートの提出を全学生に求め
た。本フィールドワークにおいて、実施上の大きなト
ラブル等は発生せず、学生らはステークホルダーの
話を熱心にメモしたり、多くの質問を投げかけたりす
るなど、積極的な行動がみられた。提出されたレポ
ートからも、身近な場所でありながらこれまで気付か
なかった文化資源の存在や価値を意識する記述が多数
みられ、コースにおける今後の学びに結びつく経験や
学習機会となったことがうかがわれた。

フィールドワークによる学びを一層効果的なものと
するためには、座学の講義内容との関連性の強化や、

学生に対して対象とする地域や事物などに注目する意義を丁寧に説明していくことなどが重要であろう。また学生の意識において、個々のフィールドワークによって得られた知見やスキルを単発的な成果としてのみみずのではなく、次のフィールドワークにおけるより高度な調査の実施や企画立案、さらには地域の課題解決へとつなげていくプロセスとして位置付けられるよう、教員が指導に当たる必要性も指摘できる。

文化資源マネジメントコースが目指す学びや社会共創の実現に向けて、学生・教員が地域のステークホルダーと密接に協力し合える関係を構築できるよう、教育体制の一層の充実を進めていきたい。

付記

本フィールドワークの実施に際して、松山市産業経済部道後温泉事務所の柴田 仁様・山下勝義様、愛媛コンソーシアムGENKIの丹生谷善久様・神石 都様、松山銀天街L字地区再開発連絡協議会の伊賀上浩様（以上、訪問順）をはじめとする地域のステークホルダーの方々には、貴重なお時間を割いていただき、多くのご案内・ご教示を賜った。記して厚く御礼申し上げます。

なお、本フィールドワークの様子は、2017年4月25日付の愛媛新聞において「大学生が地域の歴史や風土学ぶ」と題して報じられた。

参考文献等

淡野寧彦（2017）：大学初年次生に対する移動・観察型フィールドワークの実践. 大学教育実践ジャーナル, 15, 45-51.

愛媛大学社会共創学部HP <https://www.cri.ehime-u.ac.jp/>

（最終閲覧日：2017年6月5日）

